

負け続け、悔し涙を流した者たちが、逆境をはねのけて大きな成果を残す…そんなドラマチックな実話は、これまでも数多く映画化されてきた。だが、「米領サモア・サッカー代表チーム」にまつわるこの物語ほど、単なるスポーツドラマを超えて、心地良い勇気をもらえる逸話はないかもしれない――。

10年以上にわたりFIFAランキング最下位、世界最弱と言われた米領サモア・サッカー代表チームが2014年FIFAワールドカップ・ブラジル大会予選で初の勝利を勝ち取った、この奇跡の実話を、『ジョジョ・ラビット』(19)でアカデミー賞。脚色賞を受賞し、世界を感動の涙に包んだタイカ・ワイティティが完全映画化。



## 負けを知る人々に贈る、人生の応援歌!

「世界最弱チーム」を立て直すために派遣されたのは、選手としても 指導者としても実力を十分に兼ね備えたトーマス・ロンゲン(マイケ ル・ファスベンダー)。しかし彼は、ある人生の悲しみを経験したこと で感情のコントロールが効かなくなり、サッカー界から追放寸前 だった。あまりにもカルチャーが違うチームに苛立ちを隠せないロ ンゲンだったが、彼らが持っているひたむきさや優しさに触れるに つれ、いつしか心に負った傷が癒やされていく。

心に傷を抱えた孤独なコーチと島国の選手とのぶつかり合い、第3の性を持つ"ファファフィネ"と呼ばれる選手が初めて公式戦に出場した実話もほぼ活かしながら、それぞれの人生と幸せに向き合い、やがて分かりあっていく温かい心の交流をユーモラスかつ感動的に描き出した。鬼コーチ、トーマス・ロンゲンを演じるのは、その豊かな才能で、数々の賞に輝く名優マイケル・ファスベンダー。"負けを知る"すべての人々にエールを贈る、心揺さぶるヒューマンドラマだ。





